

Title	奥の細道ところどころ（五）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1952, 7, p. 34-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68413
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

奥の細道とところどころ (五)

小島 吉雄

九、衣が関

衣が関には新旧の二つがある。従つて、平泉の条に

泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせくと見えたり

とある文章の解釈に三説が生じるのである。旧関は平泉附近、中尊寺に寄つたところにあり、新関は白鳥村、今の前沢町字鶴ノ木にあるといふ。問題は、この衣が関の位置如何にあるのである。第一説は、衣が関を旧関と見る説で、泰衡の旧跡と南部口との間に衣が関があると見るのである。第二説は、衣が関を新関と見る説で、此の所の本文を「泰衡らが旧跡は衣が関を前衛として南部方面をさしかためてをる」といふ意味に解釈するのである。第三説は、衣が関は旧衣が関を指してゐると見るのであるが、泰衡の旧跡を新衣が関のあたりにあつ

たと考へ、このところの本文を、「平泉からは旧衣が関を中に隔てて南部方面をさしかため」の意にとるのである。この第三説は樋口功氏の「奥の細道評釈」の説であるが、吉田東伍博士の地名辞書も同様の説である。

さて、この三説のうち、どれが正しいのであるか。今回はその点について述べようと思ふ。

第一に、このところの文章は、作者が高館に登つて、四方を眺望してゐるところである。従つて、この高館からの眼界に、泰衡らの旧跡も衣が関も南部口も入つてゐると見なければならぬ。ところが、「隔てて」といふ語を芭蕉はどういふ場合に使用してゐるかを調べてみると、「奥の細道」の出羽への山越えの条に、

「是より出羽の国に大山を隔てて道さだかならざれば」

といふ文章がある。この場合の「隔てて」といふ語の使ひ方は、芭蕉の今ある堺田と出羽との間に大山が横たはつてゐて隔てたなつてゐるといふのである。この用例から類推すると、泰衡の旧跡と南部口との間に衣が関が横たはつてゐると考へなければならぬ。すなはち、泰衡の旧跡も衣が関も南部口もみな芭蕉の眼下に見渡されて、しかも、泰衡のあとと南部口とが衣が関に隔てられてゐるといふ地形にあるのである。

この文章から、右のやうな解釈が導き出されてくるとなると、さきにあげた三つの説のうち、第二説と第三説とは正しくないといふことにならざるを得ない。もとの白鳥村にあつたといふ新関は、平泉から二里ばかり北方にあつて、この場合は高館の眼下に見えるといふわけに行かない。旧関ならば眼下に見えるのである。この点から言つて、第二の説は成り立たない。また、「…を隔てて」といふ芭蕉の用例から言へば、第三の樋口氏の説もまた成り立たないのである。そして、結局、第一の説、すなはち、泰衡の旧跡は旧衣が関を中にはさんで南部口をさしかためてゐるやうに見えるといふ解釈を正しいとしなければならぬ。従つ

て、また、泰衡の旧跡といふのは、秀衡らが住んでゐた平泉館にあつたか、もしくは、その附近にあつたものとして、芭蕉はこの文を綴つてゐるものと思はれるのである。

なほ、第一説を正しいとする傍証として、曾良の随行日記の記事とその名勝備忘録の記事とをあげるべきである。随行日記によれば、芭蕉たちは、平泉から高館、衣川、衣が関、中尊寺と経めぐつてゐる。そして、その衣が関が旧衣が関であることは、曾良の名勝備忘録に、「高館ノ後、切通シノヤウナル有り、是也。南部海道也。ソバノ小キ土橋ヲ桜川ト云」とあるのによつても明らかである。これで見ると、高館のそばに南部街道沿ひに衣が関があつたのであつて、さうすると、芭蕉のこのところの文意にもよく合致するのである。

最近の注釈書を見ると、曾良の右にあげた記録を引用して、奥の細道の衣が関を旧関をさすのであるとししてゐるものが多くなつて来たが、奥の細道の本文解釈の上からその然るべきを導き出さうとするものが見当らないから、あへてこの一文を草したわけである。

この論は、曾て俳誌「東炎」の昭和二十

三年十一月号に載せたことがあるが、この雑誌は微々たる地方の小俳誌であるから、広く一般に知られてゐないと思ふので、重

ねてここに書きしるすのである。

大阪大学教授